

小特集：何(誰)のための社会進歩か？——福祉国家の再構築——

序文

本特集は、2018年11月11日に開催された一橋大学政策フォーラム「何(誰)のための社会進歩か？——福祉国家の再構築——」をもとに構成された。「社会進歩」は通常、一般的で普遍的な価値を当是として、効率性や公平性といった理念を追求する。それは人を鼓舞する一方で、目立たぬ存在を置き去りにしかねない。それに対して、個別・特殊を尊重する相互性や公共性の視点から「福祉国家」の組み換えを図ろう、というのがテーマの趣旨である。以下に、問題関心を簡単に記したい。

第二次大戦の前夜、シュンペーターは名著『資本主義・社会主義・民主主義』を刊行した。20世紀の体制論は、これら3つの対立構図に縮約されたといっても過言ではない。だが、21世紀のいま、われわれの関心は、多く「福祉国家(社会)」に向けられている。比較を通じて各国・各社会の特徴をとらえるには、再分配を通じて社会保障・福祉を進める国家(社会)という、より緩やかに定義された概念が適するからであり、——より本質的には——体制のあれこれを論ずることを越えて、あれこれの体制のもとで生きる個々人の多様な現実に接近したいがためである。

実のところ、この関心は、アダム・スミス以来の近代経済学の歴史と重なる。一国の富の成長が重要であるとして、その究極の目的は個人にある。生産・分配・消費のグローバルな循環が世界経済を形づくるとして、その究極の評価は、特定の場所、特定の時間に、個々人が享受する福祉や厚生とその変化にもとづく。経済学はその本質において、人々の多様な生活のありようと多元的な評価のあり方から切り離されるものではなかった。個人の福祉への関心は、経済学者たちの——またしても立ち返るべき——

学問の原点といえるだろう。

本企画は、この学問の原点に立ち返る試みの一つである。これは次の2つの糸を横糸・縦糸として編まれた。1つは、開発経済学と厚生経済学を結ぶ糸である。これまで、途上国の開発支援のありようとあり方を主題とする開発経済学と、資源配分の方法ならびに意思決定手続きの理論的解明を主題とする厚生経済学は、対象の特定(specification)と測定(measurement)と評価(evaluation)という共通の研究課題をもちながらも、同じテーブルで議論し合うことは皆無だった。本企画は「相互性」と「公共性」を鍵概念として、両者の対話を図った。

他の1つは、IPSP(International Panel on Social Progress)とHIAS(Hitotsubashi Institute of Advance Study)を結ぶ糸である。IPSPは体制・制度やメカニズムの構想に関心をもつ欧米の経済学者を中心に、学際的な研究成果の普及を意図した、ボランティアな組織である。HIASは社会科学の総合大学という一橋大学の特性を生かして、日本から世界へと、学際的・国際的研究の成果の発信を意図した組織である。本企画は、「社会進歩」と「福祉国家」を鍵概念として、両者の射程を交錯させた。

「相互性」と「公共性」を横糸として、「社会進歩」と「福祉国家」を縦糸として織りなす空間は、これまで経済的な空間から排除されてきた問題に光を当てることを可能とした。さらに、これまでもっぱら経済的な視角で捉えられてきた問題を新たな角度からとらえ直すことをも可能とした。

一例を挙げよう。歴史的不正義の補償問題は、これまで、もっぱら国家による結果的な所得保障の観点から、ほとんど公的扶助と同義に扱われてきた。その背後には、成長し続けなければ淘汰されるという資本の論理と、社会の総和あ

るいは平均の向上を倫理的善とみなす功利主義的世界観が根強く存在する。

だが、実のところ、災厄に遭遇した人々の苦しみは貧困一般には回収されない。むしろ、それは人類が回避すべき悪の所在を教示する。私たちの日常は、このように、市場的な貢献に回収されないさまざまな種類の恩恵を受けている。はたして、他者から受けた恩恵に感謝するという、きわめてあたりまえのしくみ(「相互性」のしくみ)を——「公共性」と接続させながら——福祉国家の中に位置づけ直すことはできないものだろうか。

「相互性」・「公共性」, 「社会進歩」・「福祉国家」は、いずれも概念の内延が曖昧であり、外延がきわめて広いため、学術用語としては使い

づらい。実際、相互性は復讐の連鎖へと、公共性はポピュリズムへと、社会進歩は優生保護政策へと、福祉国家はナショナリズムへと地滑りする危険を孕んでいる。でも、だからこそ、これまでの学問が前提とする普遍性・一般性が見逃しがちな個別性・特殊性を正面から扱う可能性が開けるのではあるまいか。

本特集がきっかけとなって多くの議論を喚起するとしたら、それは望外の喜びである。最後に、一橋大学政策フォーラムの報告者・討議者・司会者、参加者すべてと、細心の注意を傾けて英語論文を訳出してくれた栗林様、谷本様に厚く御礼申し上げたい。

[後藤玲子]